The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	完了を表す-ed形容詞の形成について ： 構文アプローチの観点から
Author(s)	森藤, 庄平
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2020, 54, p. 103-120
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91381
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

完了を表す-ed形容詞の形成について*

──構文アプローチの観点から──

森藤　庄平

キーワード：完了形容詞の形成／構文／BECOMEの「際立ち」／形と意味の対応

1. はじめに

英語では，次の（1）の矢印の右側の表現が示すように，ものの空間における移動（位置変化）や状態変化を表す非対格動詞の過去分詞は形容詞として名詞の前に現れることがあり，どれも完了の意味をもつ。この完了を表す-ed形容詞を影山（1996）に倣って〈完了形容詞〉と呼ぶことにする。

(1) time that has elapsed → elapsed time, a leaf that has fallen → a fallen leaf, a window that has stuck → a stuck window, the snow that has drifted → the drifted snow (Pinker 1994: 396)

こうした自動詞を基体とする完了形容詞の形成に関して，Levin & Rappaport（1986）は2つの疑問点を挙げている。

一つ目は，同じ自動詞であっても，非対格動詞（2a）と非能格動詞（2b）とには違いがある。なぜ，非対格動詞 wilt に完了形容詞の形成が適用可能であるのに対して，非能格動詞 run では不可なのかという（3）の疑問を発している。

(2) a. wilted lettuce, a fallen leaf, an escaped convict, a collapsed tent, burst

pipes, rotten railings, sprouted wheat, swollen feet, a rusted screen, vanished civilizations, a recently expired passport, a failed bank

b. *run man, *coughed patient, *swum contestant, *flown pilot, *cried child, *exercised athlete, *sung artist, *yawned student, *laughed clown

(Levin & Rappaport 1986: 654)

(3) Why can *the wilted lettuce* mean ‘ the lettuce that has wilted ’ while *the run man* cannot mean ‘the man who has run’? (ibid., fn. 36)

二つ目は，Levin & Rappaport は，なぜ，いくつかの完了形容詞が（4a）のように recently のような修飾語によって修飾されるか，または，（4b）のように disappear に＋αの意味を語彙化した vanish でなければ，容認性が落ちるのかという疑問を，（5）のように発している。

(4) a. *an appeared ghost vs. a recently appeared book (影山 1996: 107)
(cf. #built house vs. recently built house, #a created house vs. a carefully created house (Ackerman & Goldberg 1996: 20))[1)]

b. *a disappeared civilization vs. a vanished civilization (ibid.)
(cf.*the arrived immigrant vs. reduced/fallen/increased prices (Quirk et al. 1985: 1327))

(5) Many of the adjectival passives in the examples are qualified since, as is well known, some adjectival passives sound peculiar unless qualified, for reasons that are not entirely clear. (Levin & Rappaport 1986: 614)

ここで本稿は，構文アプローチの観点から，こうした 2 つの疑問に焦点をあてて，完了形容詞の形成のプロセスを考察する。この考察によって，完了形容詞の形成によって生じる完了の意味は，動詞と接辞 -ed が単純合成的

に計算された語彙的意味ではなく，[V-ed NP] という構文（construction）が持つ構文的意味であり，完了形容詞の形成のプロセスは，構文で表せることを示す。本稿の構成は次の通り。2 節では，語彙的アプローチとその問題点を挙げる。3 節では，構文的アプローチ[2)] から，完了形容詞の形成とは，BECOME を意味強制する [V-ed NP] という形と「位置 / 状態変化の際立ち（saliency）」という意味との対応関係，つまり「構文」であるということを主張する。4 節はまとめである。

2. 語彙的アプローチとその問題点

語彙的アプローチとは，投射主義（動詞の意味から文の形が決まる）の立場から分析する方法である。その立場では，完了形容詞の形成とは動詞が持つ項構造や語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure，以下 LCS）で行われるプロセスと見做すことになる。本節では，この語彙的アプローチでの分析には問題があることを示す。

2.1. 完了形容詞の形成と項構造

Levin & Rappaport（1986）は，他動詞に適用される受動を表す -ed 形容詞の形成は，基体となる動詞の項構造に直接内項を外項化することで成されると主張し，（6a）と（6b）との適格性の違いから（7）のように提案している。

(6) a. He didn't sell the goods. → The goods are unsold./unsold goods
b. *He didn't sell the customers. → *The customers are unsold./*unsold customers (cf. 影山 1996: 95)

(7) *Adjectival Passive Formation* (revised)
Externalize (*direct argument*). (Levin & Rappaport 1986: 643)

つまり，（7）は，（6a）では sell は goods を直接内項に取るからそれを外項化でき，受動を表す -ed 形容詞が形成されるが，（6b）では sell は customers だけを直接内項にすることができないから，受動を表す -ed 形容詞は形成されないことを説明している。

Levin & Rappaport は，（6）の他動詞 sell に適用した規則（7）を，本稿が問題とする自動詞にも拡張している。そこで，前節で見たように，規則（8）の適用の可否から，非対格動詞と非能格動詞での完了形容詞の形成の可否に違いがあることを主張している。

(8) a. fall: (<y>) ― 外項化 → fallen: (y < >)
b. run: (x < >) ― 外項化 → (不適用) (cf. 影山 1996: 95)

しかしながら，こうした項構造分析には問題がある。まず，前節でみたように，wilt のような（2a）の状態変化の非対格動詞は完了形容詞になるのに対し，（9）の出現・発生 / 消滅の非対格動詞は完了形容詞にならないことが問題であることを，影山（1996: 167）は指摘している。この事実は，disappear の例（10）で示すように，（9）の動詞類も（8a）と同様の項構造を持つので，（7）も適用可能と予想するが非文法的であるので，項構造だけの分析では問題があることを示している。

(9) *the (recently) occurred earthquake, *the (recently) happened accidents, *an arisen problem,*a disappeared civilization (影山 1996: 107)

(10) disappear: (<y>) ― 外項化 → disappear: (y < >)

以上，Levin & Rappaport（1986）は，規則（7）の適用可否で，非能格動詞（*the run man）と非対格動詞（wilted lettuce）の違いから，完了形容詞の形成が動詞の意味だけを投射させた項構造で行われるとして説明した。し

かしながら，状態変化の非対格動詞は説明できるが，（9）のような出現・発生 / 消滅の非対格動詞の例は説明できないという問題点があることを見た。

2.2. 完了形容詞の形成と語彙的アスペクト

まず，完了形容詞の形成には，項構造より，動詞の語彙的アスペクトが関わるという影山（1996）の重要な指摘を見てみよう。影山は完了形容詞の形成に ACT が関与しないことを，接触・打撃の他動詞（11a）と非能格動詞（11b）（= 2b）から完了形容詞が形成されないことによって示した。

(11) a. [x ACT ON y]: *a hit boy, *the kicked man, *the slapped man, *the touched ceiling (影山 1996: 102)

b. [x ACT]: *run man, *coughed patient, *swum contestant, *flown pilot, *cried child (= 2b)

また，影山は BE しか持たない状態動詞は，（12）から完了形容詞の形成に関係しないことを示した。

(12) [y BE AT-z]: *the existed condition, *the remained problem, *a good-looked teacher (ibid.: 102–103)

それらに対して，（13）が示すように，到達アスペクトを表す BECOME を持つ非対格動詞は，完了形容詞の形成が可能である。この事実から，影山は，完了形容詞の形成には BECOME が関与することを示した。

(13) [BECOME [y BE AT-z]]: wilted lettuce, a fallen leaf, an escaped convict, a collapsed tent, burst pipes (= 2a)

以上から，影山は完了形容詞の形成には，継続アスペクトを持つ ACT や

BEは関わらず，BECOMEが関わると提案している。

しかしながら，完了形容詞の形成に到達アスペクトを示すBECOMEの有無が関わるというだけでは，十分に説明できない前節であげた（14）のような事実があることを影山は指摘している。

(14) a vanished civilization vs. *a disappeared civilization (= 4b)

なぜなら，非対格動詞vanishとdisappearは両者ともLCSに到達相を示すBECOMEを持っているので，この適格性の対比はBECOMEの有無では説明できないからである。また，「位置変化」を表す非対格動詞も，次の例で見られるように，（14）と同様の適格性の対比がみられることに注意されたい。

(15) reduced/fallen/increased prices vs. *the arrived immigrant (= 4b cf.)

なお，この事実は，1節で既に見た，Levin & Rappaportが発した（5）の疑問であることに注意されたい。本稿では，（14）と（15）を並行的に説明できる提案を，以下3節で行う。

2.3. 完了形容詞の形成と語彙的概念構造

2.2節で，影山は，完了形容詞の形成にはBECOMEが関与するが，それだけでは説明ができない事実を指摘した。つまり，非対格動詞は共通してLCSにBECOMEを含むのに，状態変化の非対格動詞には完了形容詞の形成が可能であるのに対して，出現・発生/消滅の非対格動詞（occur, happen, appearなど）には不可能であるという問題である。この問題に関して，影山は状態変化を表すvanishと出現・発生/消滅を表すdisappearとの対比を挙げて論じた。

(16) vanished civilization vs. *a disappeared civilization (= 4b)

影山は，この問題を説明するために，金水（1994）の発想を採用している。Fillmore（1968）は，変化の結果には（17）のように 2 種類あることを指摘しているが，金水は，それらの目的語の違いに注目した。すなわち，変化の結果には，（17a）のように既に存在する対象物に作用する変化の場合と，（17b）のようにもともとは存在せず，変化の結果として対象物が生まれる場合とがある。

(17) a. 被動目的語 (affectum object): to dig the backyard
b. 結果目的語 (effectum object): to dig a hole

この 2 種類の目的語に基づいて，金水は，状態変化の動詞と出現・発生 / 消滅の動詞とのLCS上の区別を次のように表示した。

(18) a. 〈状態変化動詞〉
[$_{\text{EVENT}}$ $\boxed{y}$ BECOME [$_{\text{STATE}}$ y BE AT-z]]
b. 〈出現・発生 / 消滅動詞〉
[$_{\text{EVENT}}$ BECOME [$_{\text{STATE}}$ y BE AT-z]] (cf. 金水 1994: 39)

ここで，当該の問題に目を向けると，影山は，vanish は（19a）の意味のように，元の状態から消滅に至るまでの過程を含んだ意味「状態変化」を表しているので，既に存在する対象物 $\boxed{y}$（被動目的語）を vanish の LCS に含んでいるが，disappear は（19b）の意味で，「出現・発生」（結果目的語）が無くなったことを表しているので，元の対象物 $\boxed{y}$ はLCSに含まないと考えた。

(19) a. vanish: ‘disappear by decaying’ (OED) (cf. vanish away)
b. disappear: ‘cease to be visible, be lost’ (OED) （影山 1996: 108）

ここで影山は，金水（1994）の BECOME が取る名詞句項 $\boxed{y}$ の有無に違いの

ある LCS（18）に従い，状態変化を表す vanish と出現・発生 / 消滅の動詞である disappear は，（20）のような LCS をそれぞれ持つと仮定した。

(20) a. $[_{EVENT}\ \boxed{y}$ BECOME $[_{STATE}$ NOT $[_{STATE}$ y BE AT-$_Z]]]$

(ex. a vanished civilization)

b. $[_{EVENT}$ BECOME $[_{STATE}$ NOT $[_{STATE}$ y BE AT-$_Z]]]$

(ex. *a disappeared civilization)

(cf. 影山 1996: 39)

すなわち，vanish が意味する状態変化（20a）では，BECOME（変化）の影響性（affectedness）を持つ対象物である BECOME の項（$\boxed{y}$）が有るが，disappear が意味する出現・発生 / 消滅（20b）では $\boxed{y}$ が無いという違いとして区別している。こうした区別によって，完了形容詞が表す変化の推移を（20a）で $\boxed{y}$ → y と図示したように初期状態 $\boxed{y}$ と変化後の状態 y との繋がりとして把握できる。以上から，vanish は完了形容詞が成り立つが，それが把握できない disappear は完了形容詞が成り立たないと主張している。

影山は，この変化の推移を前提として，BECOME を持つ動詞の LCS で BE の主語 y が結果状態を担うものとして取り立てられる「LCS 組み替え規則」（21）を完了形容詞の形成過程とし，その適用により，もともとの状態変化の構造から状態変化の結果対象 y を取り出して，述語 BE WITH[3] の主語に格上げして，結果対象を焦点化する。y BE WITH は「y というのは，これこれの状態変化を被った（WITH . . .）状態にある」ということを述べており，結果対象の取り立てを行っている。

（21）英語 -ed 形容詞の形成

$[_{EVENT}{}^{***}\ [_{EVENT}\ \boxed{y}$ BECOME $[_{STATE}$ y BE AT-z] → y_i BE WITH $[_{EVENT}{}^{***}$ $[_{EVENT}\ \boxed{y}$ BECOME $[_{STATE}\ y_i$ BE AT-z]]] (ibid.: 118)

行為連鎖の観点からは，（22）のように，結果状態が焦点化されて認知的な際立ちを獲得することになる。

（22）結果状態の焦点化

行為→変化→結果状態 ⇒ 行為→変化→$\boxed{\text{結果状態}}$ (ibid.: 105)

ここで注意すべきは，影山の分析（21）は，BECOME の名詞句項$\boxed{\text{y}}$がある場合のみ，BE の項 y が BE WITH の主語に繰り上がると提案しているということである。なお，本稿では，BE WITH という述語を採用するが，以下（23）と（27）に関連して述べるように BECOME の名詞句項$\boxed{\text{y}}$の有無という分析は採用しないことに注意されたい。

ここまで影山の分析を見てきたが，この LCS 分析には，次に述べる問題があることを指摘する。まず，1 節で appear に関して述べたのと同じく，recently, newly, suddenly のような修飾語が共起すると disappear は完了形容詞として使用される。

(23) a. *a disappeared civilization vs. a recently/newly disappeared civilization

b. *the disappeared jewels vs. the suddenly disappeared jewels

(安井他 1976: 48)

実際，次のような例が多く観察される。

(24) a. One rainy day, preadolescent Egan explores the mountain with Annabelle, a dog belonging to a **recently disappeared** relative, Ott.

(Jaqueline Schachter Weiss, *Prizewinning Books for Children*)

b. With a splendid show of power, the **newly disappeared** sun was setting fire to the clouds. (Enrique A. Laguerre, *Benevolent Masters*)

c. On the cross-street, in front of the fallen horse tablet, the **suddenly**

disappeared fisherman appeared out of thin air again.

(Tang Yi Gu Dian, *Myths of Mountains and Seas*)

こうした事実から，（21）の適用の可否は BECOME の名詞句項 $\boxed{y}$ の有無によるだけでは説明できない。つまり，修飾語 newly, recently, suddenly の共起に関係なく，（25）が示すように，disappear の LCS には名詞句項 $\boxed{y}$ がないので，（21）が適用不可となり，a recently/newly disappeared civilization も非文法的と予測することになるが，そうではない。

(25) disappear: $[_{\text{EVENT}}\ \Phi\ \text{BECOME}\ [_{\text{STATE}}\ \text{NOT}\ [_{\text{STATE}}\ \text{y BE AT-z}]]]$

次の問題点は，「位置変化」（どのように移動するか）に言及せず「到着」のみを表す arrive や come[4] のような動詞が，完了形容詞の形成を受けないということである。arrive の意味は“to come to a position”（OED）で，‘y arrived at z’という表現は y という対象が既に存在するので，次のように LCS で表示できる。

(26) arrive: $[_{\text{EVENT}}\ \boxed{y}\ \text{BECOME}\ [_{\text{STATE}}\ \text{y BE AT-z}]]$ (cf. 影山 1993: 117–118)

BECOME が名詞句項 $\boxed{y}$ を取るので，（25）と対照的に，（21）が適用可能で文法的と予測されるがそうではない。

(27) *the arrived immigrant vs. fallen prices (= 4b)

以上，基体動詞の BECOME の名詞句項 $\boxed{y}$ の有無に基づく，完了形容詞の形成（21）には問題があることを示した。

3. 提案：構文主義アプローチから

これまで，完了形容詞の形成は，語彙的アプローチからの 2.1 節（7）の動詞の項構造と 2.3 節（21）の動詞の LCS 分析では問題があることを示した。本節では，構文的アプローチから，完了形容詞の形成とは，基体動詞の項構造や LCS だけに関与する規則ではなくて，構文スキーマ（形：[V-ed NP] と意味：「位置 / 状態変化の際立ち」との対応）で説明されることを主張する。

3.1. BECOME の「際立ち」

本稿では，完了形容詞の意味は，基体動詞の意味だけではなく，構文 [V-ed NP] それ自体が持つ構文的意味であることを主張する。これまで，完了形容詞の形成に関与する意味は，「結果状態の推移」であり，「結果状態の焦点化」であることを見てきた。BECOME を一項述語（BECOME が STATE だけを項にとる）とみなす appear, occur のような発生・出現 / 消滅の動詞は，*an disappeared civilization が示すように，完了形容詞は形成されない。そこで，2.1 節では，本来の BECOME（状態の発生）の意味に加えて，完了形容詞の形成が関わるのは「状態変化の際立ち」（初期状態と変化後の状態の推移（culmination））の意味であることを見てきた。

以下，こうした構文的意味を，どのように形 [V-ed NP] と対応づけるのかを探っていく。この考察から，完了形容詞の形成が関与する「状態変化の際立ち」の意味は，形 [V-ed NP] が BECOME 事象（event）を同定（identification）し，BECOME の「際立ち」[5] によって生じることを示す。

3.1.1. BECOME + α

まず，a vanished civilization vs. *a disappeared civilization の対比について考えてみよう。前節で述べたように，「状態変化の際立ち」を表す vanish の BECOME は，[BECOME (by vanishing)] のように「BECOME + α」であるのに対して，disappear の BECOME は，[BECOME] だけである。

一方，同じことが，fallen prices と *an arrived immigrant との関係についても言える。下の方向へという「位置変化の際立ち」を表す fallen の BECOME は，[BECOME (by falling)] のように「BECOME + α」であるのに対して，どのように又はどの方向に移動したのか「位置変化の際立ち」には言及せず，「到着」のみを表す arrive の BECOME は，[BECOME] のみである。こうした対比から，完了形容詞の形成の基になる資格がある，fall, vanish などの状態変化動詞の意味は次のように表示される。

(28) [BECOME (BY V-ing) [BE AT-z]] [6)]

ここで，形：[V-ed NP] が，対応する概念構造に意味強制（coercion）[7)] して，（28）の意味が生じると考えられる。（28）を使用して，fallen prices vs. *an arrived immigrant と a vanished civilization vs. *a disappeared civilization の対比を次のように表示しよう。

(29) a. a vanished civilization ⇔
[civilization$_i$ [BE WITH [BECOME (by vanishing) [civilizaiton$_i$ [NOT [BE AT-APPEARANCE]]]]]]

b. *a disappeared civilization ⇔
[civilization$_i$ [BE WITH [BECOME [civilizaiton$_i$ [NOT [BE AT-APPEARANCE]]]]]]

(30) a. fallen prices: ⇔
[prices$_i$ [BE WITH [BECOME (by falling) [prices$_i$ [BE AT-[$_{PLACE}$]]]]]]

b. *an arrived immigrant ⇔
[immigrant$_i$ [BE WITH [BECOME [immigrant$_i$ [BE AT-[$_{PLACE}$]]]]]]

以上，完了形容詞の形成に関与する意味は，「BECOME + α」（位置 / 状態変

化の際立ち）であることを示した。

3.1.2. BECOMEに共起する修飾語

この節では，BECOMEを際立たせるもう一つの仕組みを論じる。これまで，（31）が示すように，発生・出現 / 消滅の動詞 disappear や到達動詞 arrive は，newly, recently などの修飾語が共起しなければ，完了形容詞は形成されないことを見た。

(31) a. *a disappeared civilization vs. a recently/newly disappeared civilization
b. *arrived packages vs. newly/recently arrived packages

しかしながら，（32）のように，yesterday のような特定の過去時や ship のような動作の様態を描写するような修飾語は，完了状態を表す BECOME を修飾できないので完了形容詞と共起しにくい。

(32) *the yesterday arrived packages, ship-arrived packages（船で到着した荷物）
（影山 1996: 120）

（31）と（32）の事実は，影山 (1996) が指摘するように，完了形容詞と共起する修飾語は，newly のような完了の時間を描写する修飾語のように，BECOME の部分を修飾できるものに限られることを示している。このことは，（33）[8] から，newly が BECOME 事象を同定する要素として機能していると考えられる。

(33) Both subevents must be “identified” by some element in the sentence.
(Grimshaw & Vikner 1993: 144)
(cf. THE ARGUMENT-PER-SUBEVENT CONDITION: There must be at least one argument XP in the syntax per subevent in the event structure. (Rappaport Hovav & Levin 2001: 779))

以上から，次のように構文的に表示できる。

(34) a. newly arrived packages ⇔

$[\text{packages}_i\ [\text{BE WITH}\ [\underset{\underset{\text{newly}}{|}}{\text{BECOME}}\ [\text{packages}_i\ [\text{BE AT-}[_{\text{PLACE}}\ ]]]]]]$

b. *the yesterday arrived packages ⇔

$[\text{packages}_i\ [\text{BE WITH}\ [\underset{\underset{\text{yesterday}}{+}}{\text{BECOME}}\ [\text{packages}_i\ [\text{BE AT-}[_{\text{PLACE}}\ ]]]]]]$ (cf. 影山 1996: 119)

以上，言語形式として現れるnewlyのような修飾語がBECOMEを修飾することによって，本来のBECOME（状態の発生）の意味に加えて，「位置/状態変化の推移」が際立たせられるので，完了形容詞の形成が可能となる。つまり，ここでは副詞要素によってBECOME事象が同定されているといえる。

3.2. 完了形容詞の形成と構文スキーマ

これまでの考察から，完了形容詞の形成には次の構文スキーマを提案する。

(35) a. $[\text{V-ed NP}]_{\text{NP}}$ ⇔

$[\text{NP}_i\ [\text{BE WITH}\ [\boxed{\text{BECOME}}\ (\text{BY V-ing})\ [\text{NP}_i\ \text{BE AT-}[_{\text{PLACE/PROPERTY}}\ ]]]]]$

b. $[\text{Modifier V-ed NP}]_{\text{NP}}$ ⇔

$[\text{NP}_i\ [\text{BE WITH}\ [\boxed{\text{BECOME}}\ (\text{Modifier})\ [\text{NP}_i\ \text{BE AT-}[_{\text{PLACE/PROPERTY}}\ ]]]]]$

（35a）は，fallen prices, a vanished civilizationなどが例となり，（35b）の場合は，newly arrived packages, the recently disappeared civilizationなどが例となる。[9)]

4. まとめ

本稿では，完了形容詞の形成のプロセスを構文的アプローチの観点から考

察した。語彙的アプローチの観点からの，基体動詞だけの項構造分析（7）と LCS 分析（21）での完了形容詞の形成規則の問題点を指摘した。これらの問題点を解消するために，完了形容詞の形成のプロセスを構文とみなし，（35）を提案した。

［注］

＊ 本稿は，平成 29 年度大阪大学国際共同研究促進プログラム ―準体法研究を中心とした機能文法理論の新展開―（於 大阪大学）における「完了 -ed の構文的機能について」の発表内容に基づき，加筆修正を行ったものである。

1） 本稿では，他動詞に関わる受動形容詞の形成は扱わないが，本稿で主張する完了形容詞の形成の構文スキーマは受動形容詞の形成にも当てはまると考えている。今後の課題にしたい。

2） 本稿は，Booij（2010）や Jackendoff & Audring（2020）などの構文アプローチの視点から論じている。

3） BE WITH は，BECOME, BE のような述語分解によって得られるアスペクト述語ではなく，事象関数として機能していることに注意。

4） Pesetsky（1995: 23）で，*（newly）come packages が挙がっている。

5） 影山（1993: 114）には，結果状態を表す BE が焦点化されることが述べられているが，本稿では，BECOME も焦点化されると考える。本稿では，影山に従い，BE の焦点化は BE の主語から BE WITH の主語への繰り上げという考えを採用している。

6） （BY V-ing）の BY は手段を示しているので，位置 / 状態変化を推移させる「手段」が BECOME を際立たせると考えられる。

7） この意味強制は BECOME を際立たせる語彙従属化であることに注意されたい。Levin & Rapoport（1988）は，(i) の矢印で示されるように，元は主節であった manner/instrument 節が従属節に格下げされる語彙従属化という意味操作を提案している。

(i) LCS: manner/instr → LCS: [result BY manner/instr]
(BY is used to represent ‘by means of’ or ‘in the manner of’)
(Levin & Rapoport 1988: 282)

本稿では，構文的観点から (ii) のように，形 [V + -ed] が，それに対応する概念構造に語彙従属化を強制し BECOME が際立つことになると考えている。

(ii) [V + -ed] ⇔ [BECOME (BY V-ing)]

ここで重要なのは，(ii) は，V と -ed の各々の語の意味だけでは出てこない新たな意味（BECOME が前景化されるという構文的意味）が生じることを示している点である。

8） 事象の同定条件は，Rappaporot Hovav & Levin（2001）では，アスペクト述語の項が事象を同定するとしているが，本稿では，Grimshaw & Vikner（1993）に従って，newly のような修飾語も事象を同定すると考える。

9） a recently disappeared civilization に対して，1 節（9）の *the (recently) occurred earthquake, *the (recently) happened accidents が示すように，recently や newly が修飾しても認容されない例があることに注意。この問題について，a recently disappeared civilization が可能なのは，occur や happen にない NOT が，修飾要素と一緒になって完了形容詞の形成に寄与していると考えられる。また，位置変化を表す注 4 の *(newly) come packages と newly arrived packages の対比についても同じことが言える。つまり，arrive は come の意味に加えて‘to a position’の意味を含んでいるので，この意味が修飾要素と一緒になって完了形容詞の形成に寄与していると考えられる。ここで重要なのは，disappear の NOT や arrive の‘to a position’は，recently のような（Modifier）と一緒に BECOME 事象を同定するが，vanish の（BY V-ing）は単独で，BECOME 事象を同定することである。この問題については，今後の研究に委ねたい。

［参考文献］

Ackerman, Farrell and Adele E. Goldberg (1996) “Constraints on Adjectival Past Participles,” in Adele E. Goldberg (ed.), *Conceptual Structure, Discourse and Language,* CSLI Publications, 17–30.

Booij, Geert (2010) *Construction Morphology,* Oxford University Press.

Fillmore, Charles J. (1968) The Case for Case, in Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.), *Universals in Linguistic Theory,* Holt, Rinehart & Winston, 1–25.

Grimshaw, Jane and Sten Vikner (1993) “Obligatory Adjuncts and the Structure of Events,” in Eric Reuland and Werner Abraham (eds.), *Knowledge and Language: Vol. 2, Lexical and Conceptual Structure,* Springer, 143–155.

Jackendoff, Ray and Jenny Audring (2020) *The Texture of the Lexicon*, *Relational Morphology and the Parallel Architecture,* Oxford University Press.

影山太郎（1993）「完了形容詞と語概念構造」『関西学院大学人文論究』43（2），110–125.

影山太郎（1996）『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版.

金水敏（1994）「連体修飾の『～タ』について」田窪行則（編）『日本語の名詞修飾表現：言語学・日本語教育・機械翻訳の接点』くろしお出版，29–65.

Levin, Beth and Tova R. Rapoport (1988) "Lexical Subordination," *CLS 24,* 275–289.

Levin, Beth and Malka Rappaport (1986) " The Formation of Adjectival Passives," *Linguistic Inquiry 17,* 623–661.

Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades,* MIT Press.

Pinker, Steven (1994) *The Language Instinct: The New Science of Language and Mind,* Penguin Books.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language,* Longman.

Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) "An Event Structure Account of English Resultatives," *Language 77,* 766–797.

安井稔・秋山怜・中村捷（1976）『現代の英文法：第7巻，形容詞』研究社出版．

（大学院博士後期課程学生・岐阜市立女子短期大学英語英文学科教授）

SUMMARY

The Formation of the *-ed* Perfect Adjective:
A constructional view

Shohei Morito

This paper deals with the formation of 'the *-ed* Perfect Adjective' based on intransitive verbs such as *a **vanished** civilization* and *the recently **disappeared** civilization*, from a constructional point of view. It focuses on (1) the contrast between *a vanished civilization* and **a disappeared civilization* and (2) the contrast between *the recently disappeared civilization* and **a disappeared civilization*. This research claims that these contrasts can be explained respectively by (1) the construction [V-ed NP]$_{NP}$ ⇔ [NP$_i$ [BE WITH [BECOME (BY V-ing) [NP$_i$ BE AT-z]]]] and (2) the construction [V-ed NP]$_{NP}$ ⇔ [NP$_i$ [BE WITH [BECOME (Modifier) [NP$_i$ BE AT-z]]]]. Based on these constructions, *a vanished civilization* can be represented as [*civilization*$_i$ [BE WITH [BECOME (by *vanish*-ing) [*civilization*$_i$ [NOT [BE AT-APPEARANCE]]]]]] and *the recently disappeared civilization* as [*civilization*$_i$ [BE WITH [BECOME (*recently*) [*civilization*$_i$ [NOT [BE AT- APPEARANCE]]]]]]. This means that BECOME must be salient to form the *-ed* Perfect Adjective by means of (1) (BY V-ing) or (2) (Modifier).